

松本清張集

現代の文学を  
27

現代の文学 = 27

松本清張集



黒い福音  
点と線  
真贋の森  
黒地の絵  
証言  
逃亡  
運慶

河出書房新社

現代の文学27 松本清張集

清張

© 1963

責任編集

川端康成 丹羽文雄  
円地文子 井上靖  
松本清張 三島由紀夫

---

昭和38年5月5日 初版印刷  
昭和38年5月10日 初版発行

定価 390円

著者 松本清張  
発行者 河出孝雄  
印刷者 高橋武夫  
装幀 原弘(N.D.C)

印刷・大日本印刷株式会社  
本文用紙・本州製紙株式会社  
函貼・神崎製紙（ミラーコート）  
同納入・東邦紙業株式会社  
クロス・日本クロス工業株式会社  
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社  
神田小川町三の八

電話東京(291) 3721~7  
振替口座 東京10802

---

製本・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

黒い福音	三
点と線	三五五
真贋の森	四七五
黒地の絵	五三七
証言	五六五
逃亡	五七九
運慶	六〇一

解 年

說 譜

.....

桑原武夫……六七

插画 小磯良平  
写真 三木 淳

松本清張集



黒  
い  
福  
音



# 第一部

## 1

東京の北郊を西に走る或る私鉄は二つの起点をもっている。

この二つの線は、或る距離をおいて、ほぼ並行して、武蔵野を走っている。東京都の膨れ上った人口は、年々、郊外へ住宅を押し拡げてゆくから朝夕は乗客で混み合う。

しかし、二つの線の中間地帯は、賑かな街にもなりきれず、田園のままでもなく、中途半端な形態をとっている所が多い。

この辺りになるとナラ、カエデ、クヌギ、カシなどの雑木林が到るところに残っている。古い径は、その林の

中に入っている。林の奥には農家の部落がひそんでゐる。が、それについて行くと、部落の隣は、忽ち新しい住宅地に変わる。この辺は、古い武蔵野の田野と、新しい東京の部分とが、ちぐはぐに錯綜している地帯であつた。

夕方の景色は、田園調で美しい。広い畠と、その向うに立っている林とが蒼靄めて黝み、端には白い夕靄が立つ。夕焼けの広大な雲を背景にして、教会の尖塔が黒い影絵になって見えるところなどは、その気持のないものでも、宗教的な詩心を起す。

實際、尖塔のそびえているその教会の眺望は、どれだけこの辺を歩く者に詩的な情感を与えているか分らないのである。昼間は、赭土の畠の涯に、尖塔の十字架と建物の白い壁が陽を受けて輝く。夕方には壯麗な空を背景に、それが絵画的なシルエツトとなる。

夜は——この辺はひどくもの寂しい。二つの線のどの駅からでもよいが、一本道の商店街を過ぎると、賑かな灯は跡切れ、暗い塀のつづく通りになる。人工的な灯火が消え、急に自然の昏いひろがりを感じるのである。

新道から切れて、旧道になると、道はいくつも曲つて、畠と林の間につづく。その道も、途中でいくつかに岐れて、別の林の中に入っている。家はあるが、跡切れているから、もし、目印にしようと思えば、路傍の道祖

神ぐらいであろう。

事実、ここに来る途中で道順を訊いても、この道を歩くと地藏さまに突き当るから、それを右に行けとか、左に曲れ、とか教えるであろう。

石地藏は、草の繁みの中に、壊れかけている。晴れた夜だと、畠の涯にも、木立ちの裾にも、ほの蒼白い夜の霧が刷<sup>1</sup>いている。雨や風の夜だと、林が騒いでいる。

しかし、その道がいつまでも続くのではない。ヤがて、黒くかたまつた住宅地に出る。この辺は、夜は、たいてい早く雨戸を閉めるから、灯の漏れている家が少ない。外灯も疎<sup>2</sup>らにしか立っていないのである。

天気の良い夜だと、この辺りから、教会の尖塔が黒い影になって見える。位置によつては、原野の中に聳<sup>3</sup>えていたり、林の間に立っていたりする。月の晩だと、尖つた先の十字架が、砂粒のようにきらりと光る。ふだん、信仰心のない者でも、これを眺めるときには、詩的な宗教心にうたれるに違いない。

その教会は、そこを中心にして二キロの半径内では、どこからでも眺められた。つまり、その教会の建物だけが、とび抜けて高く、あたりには、山の裾野の程度しかない低い人家だけが散在しているのであった。

近くに小学校が在った。ふえてきた人口のために余儀なく出来たといったような小学校で、運動場は田園に隣

り合っていた。

その小学校の前あたりにも新開地の住宅街がある。これは、旧道から入って、さらに畔道を少し掘げたような狭い道を挟んで両側にかたまっていた。家の多くは、杉や桧葉で垣根をつくっている。

が、まだ、木立ちがあり、百姓家があり、家と家の間には畠があつた。むろん、ひっそりとしたものである。通行者も、滅多に、この路地のような中には入って来ない。落葉が溜<sup>4</sup>っているようなこの道に入ってくるのは、たいていこの近所の住人であつた。

江原ヤス子が住んでいる家は、このような環境の中に在った。

その家は百五十坪くらいの地所に、十五坪ばかりの建坪だつた。家は道路側に近く建っているから、庭が広い。後庭の垣根は、よその畠に接しているが、ここに大きな犬小屋があつた。それより小さな犬小屋が、も一つ横にもある。

家の横手も広い庭になつていた。この家は道路と隣家の境に片寄つて建っているのので、後ろと横の地所が空いているのである。だから、庭というよりも、雑草の生えた空地といった方が正しい。横手の空地には、ツゲ、モチ、ヒバ、カエデ、モクセイなどの植込みがかたまつて

繁っている。どういふものかモチの樹が多い。

門は二つあった。家の玄関に入る門と、横の空地に入る門とである。この二つとも、ふだんは嚴重に内側から鍵がかかっていた。

江原ヤス子は、このような家に、たった一人で住んでゐた。

犬が四頭いる。四頭ともセバードで、裏の広い犬小屋につながれているのが、犢うしほどもある大きな牡牝で、それより少し小さいのが狭い犬小屋、もう一頭は家の中に寝起きしていた。

江原ヤス子は、ふだんは、この家のあらゆる戸口に内側から錠を下ろして、ひとりで暮していた。近所の者が用事があつて来ても、絶対に家の内には入れなかつた。声をききつけると、自分が窓から顔を出すか、或いは入口から出て来ても、門扉か杉垣を隔てて話をするのである。この場合、自分が出て来た入口の扉は用心深く閉めるのを忘れなかつた。

御用聞きともそうだった。会話は、家の中と道路で交し、品物の受渡しは、江原ヤス子が家の中から出て来て、垣根越しに行なわれた。

江原ヤス子は三十七、八歳くらいにみえた。小肥りの体格で、薄い眉と、切れ長な重皮の險の眼と、肥えた鼻と、厚い唇とをもっている。決して美人ではないが、

醜い顔でもない。小肥りだから、肉感的な方である。笑うと、けたたましい声を出す。

江原ヤス子は、いつも派手な色の洋服をきていた。年齢からすると、妙に原色が多くて若やいでみえるが、顔は化粧をすることもなく、艶のない、黄色い皮膚に疲れたような皺が浮いて見えるので、不釣合ふつあひである。尤も、これは外国で暮している日本人にはよく見られる型である。

江原ヤス子は、一日中、家の中に閉じこもつて、何をしているのか分らない。訪問客は減多にない。あつても、門の外で話を交して追つ払われる。強引な外交員や御用聞きが、一足でも無理に垣根の内に入ろうものなら、犢うしのような大きなセバードに咬みつかれそうになる。この家の門柱には「犬」という標識が出て、そのために断つてある。

しかし、江原ヤス子の家には訪問客が、まるきり無かつたわけではなかつた。いや、それは、毎日、頻繁にあつたのである。が、これは日本人ではなかつた。――

江原ヤス子が、もの侘びしいくらい静かなこの田園に隣り合つた住宅地に来たのは、十数年前からであつた。尤も、そのときは、現在の家ではなく、近くの百姓家の離れを借りていた。そのころの江原ヤス子は、今よりは血色が好く、服装も貧しいくらい地味であつた。

江原ヤス子の前身については、近所の誰も知るところがない。彼女が、時おり、自分が出かけて話しこむ際の口吻では、関西の方の女子高等師範学校を出ていると云うから、どこかの学校の教師をしていたことがあるのかもしれない。しかし、百姓家の離れを借りたころの彼女は、十数年後もずっとそうだが、近くのグリエルモ教会で聖書関係の出版物の翻訳の仕事をしているということであつた。

グリエルモ教会と聞くと、人々は、すぐ近くの田圃の涯に、朝な夕なに輝いている十字架の尖塔を思い出す。昼間は、青い麦畑の上に、その聖なる建物が真白にくつきりと浮き、夕方は壮麗な茜色の雲を背景に、黒い影絵となつて立っている荘嚴な教堂――。

あまり好感のもてそうにないこの中年女が、聖書の翻訳に携わり、そのグリエルモ教会の熱心な信者だと聞けば、近所の人々も彼女を宗教的な人格に見直さなければならなかつた。人と、あまり交際するのを好まないのも、宗教への奉仕かと思われた。

実際、彼女は、日曜日ごとの礼拝はもとより、毎日のように近くのグリエルモ教会に行った。近くといつても、三キロくらい離れているから、歩くのには遠すぎる。彼女は婦人用の自転車に乗って教会に通つた。これは翻訳の仕事だから、それだけの必要があつたのである

う。

教会からも、江原ヤス子のところへヨーロッパ人の神父が小型自動車で来るのは、彼女の仕事の性質上、不思議はなさそうだった。翻訳者との打合せがあるに違いない。ただ、毎日、それも昼夜を問わず、紅毛の神父が数回やってくるのは少々頻繁すぎる印象をうけるが、聖書類の翻訳となれば気軽にはできないから、熱心な打合せが必要なのであろう。

小型自動車で来る神父は決して一人の人物であつた。彼は瘠せていて、長身で、赭ら顔をしていた。頭が禿げていて、耳のうしろから後頭部にかけて朽葉色の髪が長く残っている。西洋人の年齢は、日本人には見当がつかないが、五十二、三歳くらいではないかと思われた。ルネ・ピリエ師で、グリエルモ教会では主祭長の役をしていた。つまり、その教会では、一番偉い坊さんであつた。

ルネ・ピリエ師が江原ヤス子のところに来はじめたのは、彼女がまだ百姓家の離れを借りていたころからであつた。だから、彼女に対するピリエ師の個人的な指導は十数年という長い歳月に亘つていた。

江原ヤス子が、農家の離れを出たのは家主の都合によつたようである。家主のその理由が、ピリエ師があまりにしばしば彼女を訪問するのを厭つたためかどうかさだ



かでないが、とにかく、その近所にあつた現在の家を二十数万円で手に入れたのは幸運であつた。

この一劃は、地域的に隠れ場所になりそうな所であつた。昼間でも、広い道路を歩いてゐる通行者に気づかれない。夜は、まるきり闇の中に暗く沈み、垣根の杉が匂うだけである。

それで、一ころは、この住宅地の何軒かには、お妾さんが住んでいた。番地を聞いただけではちよつと分らないし、尋ねても、探し出すのに難儀する地域だつた。可愛い二号さんを置くには恰好な土地だつた。

だからといって、ビリエ師が江原ヤス子をこのようない劃に、昼となく、夜となく訪ねてくるのは、そのような汚れた特殊な雰囲気のないとは思われなかつた。グリエルモ教会の信者は、誰もが主祭長ルネ・ビリエ師を神の奉仕者として尊敬していた。また、顔にいつも銀色のロザリオを懸けてゐる江原ヤス子を、熱心な求道者として信じていた。

信者だけではない。グリエルモ教会には、七人の外国の神父たちがいたが、みんな主祭長ルネ・ビリエを敬愛していた。彼らは、むろん、聖職に入つてからは厳しい宗律に服し、生涯、異性ととの邪淫を拒絶して、靈魂に生きてゐる人々であつた。だから、長い間、神の道に生き



抜いてきたルネ・ピリエ師が、独身者の江原ヤス子を、その自宅に、たったひとりで訪問し、かなりな時間を過ごすことがあっても、誰もそれを邪な想像に結ぶものはなかった。

近所の人も、旦那が二号さんのところへ通ってくるように、ピリエ師と江原ヤス子の間を勘ぐる者は少なかった。少なかつた、というのは、いくらかは、その疑いをもった者があつたわけである。

しかし、そのことを信者に質そうものなら、信者は眉をあげて憤るか、慍むあわれような眼つきをして論すかであつた。

「ピリエ様と、江原さんとの間に、そのような想像を少しでもするのは神への冒瀆ぼうとくです。ピリエ様の眼をごらんなさい。いつも神へお祈りしている、穢けがれのない、澄み切つた美しい瞳をしてらっしゃるでしょう」

けれども、江原ヤス子の近所の者は、彼女についての数々の挿話を知っていた。

江原ヤス子が、農家の離れに住んでいたところは苦しい生活をしていた。そこは納屋に畳を敷いた三畳の間であつた。彼女は粗末な衣類をまとつて窶たかれていた。

尤も、粗末な身なりは、当時の日本人の全部であつた。戦争が済んだ直後で、物資のない時である。彼女の窮乏を咎めるには当らなかつた。

しかし、そのころから、江原ヤス子はグリエルモ教会にお詣りしていた。彼女がバジリオ宗派の熱心な信者だったのはずっと以前からだということは疑いようがない。

江原ヤス子の前歴が他人に全く知られていないように、彼女が過去に結婚の経験があるかどうかということも判っていない。終戦当時、彼女は三十歳になっていなかった。或いは戦争未亡人かもしれないし、結婚相手の男は戦場に駆り出されていたのかもしれないし、結婚相手の男は戦場に駆り出されてしまったのかもしれない。とにかく、彼女は、あまり仕合せそうではなかった。その不幸が、見かけのように真実だとしたら、そのことが動機で、信仰に入っていたのである。

そのじぶんから、ルネ・ピリエ師の背の高い姿が、江原ヤス子の三疊の間に、窮屈そうに現われたのであるが、当時はピリエ師はアメリカ兵が乗るようなジープを駆って来ていたのであった。グリエルモ教会から、彼女の家までジープで五分とはかからなかった。ジープは団圓の道を走り、人目につかない、ひっそりとした路地を入って行く。夜だと、全く誰もその狭い路に何が入ってひそんでいるのか気がつかないのである。

そのジープは二年後には、ヒルマンに変わった。

そのころは、江原ヤス子も、現在の広い空地のある十五坪の家に移っていた。その家を買取った事実だけで

も、彼女の生活が急速に向上したことを物語る。

そのヒルマンは、この路地に入ると、必ずナンバードレートを神父が取り換えるのであった。近くに住む中学生の目撃によると、最初のプレートは確かに他県のナンバードが、それを東京都のものに替えているというのである。が、どのような理由で、ピリエ師がそんな手間をかけるのかわからなかった。

江原ヤス子が、現在の家へ、百姓家の離れから移ってきたとき、近所への引越し挨拶に牛肉の罐詰を配ったのである。それも横文字だけが配列してある外国製だった。断っておくが、それが昭和二十二、三年の頃で、日本人は芋と粥かきで食いつないでいた時代であった。

その外国製の牛罐が、グリエルモ教会から流れて来たであろうことは容易に察しがついた。グリエルモ教会の所属する宗門バジリオ派の本部はヨーロッパに在った。だから、罐詰は本部から輸送されたであろうと誰もが思う。引越し蕎麦の代りに配られた外国製の罐詰は、多分、ノッポのルネ・ピリエ師がヒルマンに積んで江原ヤス子に運んだのであろうと、何人もが想像した。

近所に配ったのは牛罐だが、江原ヤス子が食べているのは、新鮮な生の牛肉という噂が近所に立った。むろん、肉屋が持って来たのではない。日本人の口には、まだ自由に牛肉が食えない時代であった。

これは噂だけではなく、実際に、江原ヤス子が四頭のセバードに惜しげもなく生肉を食わせているところを、垣根越しに道路からのぞき見されたのであった。それも、毎日牛肉の餌をやっているということだった。

江原ヤス子は、なぜ、急に四頭のセバードを飼ったのであろうか。彼女の服装が、俄かに毛唐じみて来たのも、そのころからであった。彼女が、訪ねて来るいかなる人物をも門の中に入れず、御用聞きとは垣根越しに話して用を足し、家の出入り口を悉く密閉して内部に籠りはじめたのも、その頃から顕著になった。

気をつけて見ると、御用聞きも、三ヶ月とは同じ店がつづかなかつた。彼女は必ず、何ヶ月目かには店をとり替えるのであった。

その後、自動車は小型車のルノーに変わった。

## 2

血色のいい神父ルネ・ピリエは、褐色の縮れた髪を、耳のうしろから後頭部にかけて日本の河童のように散らしている（頭の頂天が禿げているので）。先の赤い鼻のつけ根の両脇から深い小皺の線が開き、眼には鳥のように丸い茶色の瞳が嵌っていた。

便利なことに、江原ヤス子の家には、自動車を忍ばせて置く恰好な場所があった。二つの門のうち、一つは庭

ともつかぬ空地の方へ入ってゆくのだが、そこを入るとすぐに、モチ、アジサイ、モモ、ツゲ、カエデなどの庭木が鬱蒼と茂っている。ルノーを突込むと、その上にこれらの繁った木の枝がさしかかり、すっぽりと蔭をつくってくれる。昼でも、通りがかりの者には、ちよつと気がつくまい。夜は無論のこと、暗い闇の中である。

ルネ・ピリエ神父は、ルノーをそこに置いて鍵をかけ、江原ヤス子の家に背を屈めて入ってゆく。

神父は、一時間くらいで帰ることもあれば、一日中、ゆっくりと過すこともあり、三、四時間でひき上げることもある。要するに、それは訪問時間の不同と同じに決っていない。

近所は昼間でも睡ったように、人の気配がない。しかし、ピリエ師が、全く近所の眼に触れないで出入りすることは困難である。隣もあれば、前の家もあることだ。

近所の者とピリエ師が顔を合わすときは、神父は愛想がいい。微笑を作って目礼する。問が近いと、

「今日は」

と云うときもあった。ピリエ師は日本語がうまい。戦争前から日本に来ているのだ。ただに言葉だけではなく、岩波版の哲学書などは平気で読みこなす。しかし、そこまでは近所の者は知らなかった。

ルネ・ピリエ神父の微笑はやさしい。それは「神の微



笑」のように思われた。真黒い洋服と、頸の白いカラーとが楯ら顔によく似合う。長い指はいつも神に祈っているような手つきであった。

しかし、ビリエ神父が、なぜ時間にかまわず、不規則に江原ヤス子の家を訪問し、短い時間にしろ、永い時間にしろ、婦人とたった二人で過すかは、近所に不思議がられた。バジリオ宗派の教旨の一つに「純潔」がある。教徒は、それ故に神に奉仕するビリエ神父の人格を疑わないが、近所の俗人はそうは出来なかった。妙な眼で見ただがるのである。それを直接、江原ヤス子に訊いた者があった。

家の扉を悉く閉して、内に引込んでゐる江原ヤス子も、始終、密封された状態の中に呼吸しているわけにはゆかなかつた。彼女も、家に鍵をかけて近所歩きすることもある。尤も、それは彼女の氣に入る限られた家であつた。その家の者は、江原ヤス子を欲待し、

「神父さまは、何の用事で、あなたのところへいらっしゃるの？」

と訊いたのだつた。

小肥りの江原ヤス子は、もり上つた肩をしている。その肩を上げるようにして、

「それはね、わたしといっしょに聖書を共訳しているの  
で、どうしても始終来なければいけないの」

と厚い唇を動かして答えた。

「へえ、そりゃ大したもんですね」

近所の者は、ビリエ師よりも、江原ヤス子の語学の才能に愕くのであつた。彼女の腫れたような眼蓋と、肥えた鼻翼とを見つめて、どこにその教養がひそんでいるのかを探る眼つきになるのであつた。

尤も、それは彼女の言葉にもかかわらず、信用されな  
いことになつた。或るとき、その家の息子の高等学校一年生が、江原ヤス子を手近な語学教師と喜んで、英語のテキストを持ち出して教わろうとしたことがあつた。そのとき、彼女は言葉を左右にして、遂に一語の解説もしなかつた。

聖書を翻訳するには、ラテン語の知識を必要とするであらう。高等学校一年の英語が解らぬ者にどうしてラテン語が読めるだらうか。外国人と聖書の共訳をするなどとは、とんでもないはつたりだと、その家の者はひそかに彼女を嘲つた。この話はすぐに近隣に伝わつた。

しかし、これも近所では知らないが、江原ヤス子がビリエ神父とラテン語の原典から聖書の共訳をしていたのは事実なのである。

江原ヤス子が近所づき合いをする家は、転々と変つた。原因は彼女がすぐに先方に飽かれてしまうからであつた。